

戦争／食糧不足／地震などは「しるし」に含まれないという根拠

「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、あなたが来られて世の終わる（ギ語：シンテレイアス [the End、終わり、完了、完成]）ときには、どんな徴があるのですか。」（マタイ24：3新共同訳）

弟子たちのこの質問は、まず、「そのこと」がいつ起こるのかということでした。

「そのこと」とは、神殿の石が一つたりとも崩されないことはない、つまり神殿の完全な崩壊について語られた事柄でした。

確かに西暦70年に神殿はローマ軍によって壊滅しました。

しかし、次の事を考えると、最終成就において、クリスチャンが反キリストの手に渡され迫害されることも念頭においておられたのかも知れません。

「…あなた方は、自分たちが神の神殿であり、神の霊が自分たちの中に宿っていることを知らないのですか。もしだれかが神の神殿を滅ぼすなら、神はその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなた方はその神殿なのです。」（コリント第一 3:16 - 17）

イエスが神殿の崩壊を話されたとき、その崩壊が、「世の終わり」であるとか、キリスト再来と同タイミングであるといったことを話されたという記録はありません。

しかし、常にイエスの言葉を聞いていた弟子たちは、それまでのイエスの話しを総合して、そのような理解を得ていたのだらうと思います。

弟子たちの質問の意図と関心事は、その時、「どんな徴」があるのかという事ですから、当然それは、前兆のことでしょう。事前に、そのことを知りうる手だてとしての情報を求めていました。

どれくらい前の時点からの情報が与えられたのでしょうか。どの記述が「しるし」の範ちゅうに入るのでしょうか。

先ず、それに含まれる最後の情報をはつきりさせておきましょう。

「人の子（キリスト）の徴が天に現れる」はすでに「終わり（シンテレイアス）」そのものであり、前兆ではありません。従って「世の終わる時の徴」に含まれる最後の出来事は、その直前の出来事、つまり「太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。」（24：29）この出来事までが、「終わりの徴」に入る事が分かります。

では、始まりは何でしょうか。

それを明確にしているフレーズが6節にある「・・・そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。」という部分です。

「こうした事は必ず起こるが、まだ世の「終わりではない」と敢えて断りを入れておられるのは、どういうことでしょうか。

続く7節は、新共同訳では、訳語が省かれていますが、原語の文頭には「ギ語：ガル γὰρ」

という接続詞があります。

この接続詞は「原因、説明、推論または継続を表現するために使用される。」とされており。

「すなわち／というのは／なぜならば／それはつまり」という意味を伝えます。

ですから、6節と7節は繋がった文章であるということです。

つまり、6節から8節の内容を、分かり易く解説すると、おおよそ次のように言おうとされているのだということです。

「戦争の騒ぎなどを聞いても慌ててはいけない、確かにこうしたことは必ず起きるが、それは終わりのしるしではないので勘違いしないように、というのは、民も国も争い、飢饉や地震が起こるとしても、あくまでそれは、苦しみの始まりに過ぎないからです」

(この「苦しみ」は、陣痛／出産の痛みを意味するオーデインという語が使用されており、多くの翻訳で「産みの苦しみ」と訳されています。)

「苦しみの始まりではあるが、まだ世の終わりではない」というイエスの言葉は、これらはまだ「終わりの徴」ではないという意味に違いありません。

そして、9節からは、明らかに内容が異なってきます。

それは、異常気象や全地の全体的な傾向ではなく、クリスチャンに対する直接的な攻撃を特徴とします。

そして、24：15では、それをもたらす張本人である「荒廃をもたらす嫌悪すべき者」に言及されています。

つまり、「終わりの徴」はこの者の出現から始まります。

しるしを与えられた目的は、災いを逃れるためですから、そのしるしの範ちゅうに入る出来事は、逃げるための合図となる出来事を含むはずですが、しかし、余りにも性急に行動を起こすなら、(1世紀当時の場合、山に逃げてから、何十年も経つなら、生活は困難になり) 逃げる行動は救いに繋がらないということになってしまいます。

それゆえ、不注意に、ある出来事をしるしの範ちゅうと考えてしまうことがないように、「これは必ず起こる事だが、終わりはまだなので、慌てないようにしなさい」と諭されているのです。逃れる行動が、救いに繋がるように、最もグッドタイミングで、今この時だ！という時を見極めなければなりません。

そして「憎むべき破壊者」の登場こそが、「しるし」の始まりです。

1世紀当時では、ローマの軍隊が堡壘を築きましたので、分かり安かったですが、最終成就ではどのような様相を呈するのでしょうか。

サタンが天から投げ落とされるとすぐに、イスラエルを責めようとしますが(龍は女を洪水によって押し流そうとする)。この時、不法の人(反キリスト／小さな角)である現代版エピファネスが頭角を現し、それを未然に防ぎ(これも実際には欺きですが)イスラエルと平和条約を締結し、

安泰が約束されますが僅か3年半で裏切られることとなります。(平和だ安全だと言っている時突然の滅びが望むこととなります。)

この不法の人が聖なる場所に立つというのは、恐らく、イスラエルにとって救世主のように映る印象的な出来事で、注意深い人であれば、世界のどこにしようとも、すぐにそれと気付くはずで

「…だれにも、またどんな方法によってもたぶらかされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が来て、不法の人つまり滅びの子が表わし示されてからでなければ、それは来ないからです。彼は、すべて「神」と呼ばれる者また崇敬の対象とされるものに逆らい、自分をその上に高め、こうして神の神殿に座し、自分を神として公に示します。」(テサロニケ第二 2:3 - 4)

それで、まとめますと「終わりの徴」の範ちゅうに入る出来事は、艱難期である7年間(70週の最後の1週)の間の出来事と合致すると言えます。

又、「徴」の期間は旧約聖書中の預言で「主(エホバ)の日」と表現されている出来事とも合致します。「産みの苦しみ」という表現と「患難」というピーク時の状況は明らかに異なるもので、荒廃をもたらす者による突然の「患難」が、徐々にエスカレートしてゆく「産みの苦しみ」と表現されることはないでしょう。

やはり「産みの苦しみ期」は「艱難期」の前に存在する、比較的と言ってさらに長い期間であると言えるでしょう。

この終わりの徴に関する研究は、これまでに、幾つかのレポートで詳しく扱って来ましたので、ここでは、「終わりの徴」として見られる一連の出来事の、さらに前に見られる「産みの苦しみ」の期間に注目してみたいと思います。

この期間は、人々を惑わす者たちの出現から始まります。

「わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがメシアだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。」(マタイ 24:5)

「イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。」(ルカ 21:8)

マタイやルカの記述を合わせて考えると、これらの者は、「私の名を名乗る」「私とその者だ」と主張するようですが、必ずしも「私がイエス・キリストだ」主張するということではないでしょう。実際、複数のイエス・イエスキリストが次々に現れたら、大勢の人々が惑わされることはないでしょう。むしろ警戒し怪しむこととなります。

仮に私こそが「イエス・イエスキリストだ」と主張しても、普通の人間のやることしかできない唯の人間に過ぎない事はたちまち知られるでしょうから、「ただの変な人」と片付けられ、誰もそんな人に惑わされたりはしないでしょう。

この表現の意味するところは、大勢の偽預言者が現れる、或いは、私がメシア、つまり「油注がれた者」だと主張し、我らこそは、キリストの到来を告げる正式なキリスト公認の者だと主張するということでしょう。

ともかく、少なからぬそうした人々、グループが現れ、特定の時期を特徴付けるフームが起こる辺りからこの「産みの苦しみ」の期間は始まる事になります。

そして、続けて指摘されているのが、次に挙げる出来事です。

「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。」(ルカ 21:10,11)

この冒頭に挙げられた「惑わす者たち」とそれに続く「戦争、食糧不足、地震」の記述と黙示録 6章の4等の馬の記録は完全に対応しています。(詳しくはファイル「28 終末期の悪の三位一体と偽預言者の正体」をご覧ください)

黙示録によればこの白い馬の正体は「地の野獣」とであるとされています。

「…長い剣と食糧不足と死の災厄をもって、また地の野獣によってそれを殺すためである」。(啓示 6:8)

この「地の野獣」(ギリ語：セリーオン テス ゲス θηρίων τῆς γῆς) とは何でしょうか。

黙示録 13章には、「地、野獣」について同一のギリシャ語で示されている者が登場します。

「…わたしは別の野獣が地から上って行くのを見た。それには子羊のような二本の角があった。…」(啓示 13:11)

そしてこの者の正体に付いてさらに後の章の 19章でこう告げられています。

「…野獣は捕らえられ、それと共に、野獣の前でしるしを行ない、それによって、野獣の印を受けた者とその像に崇拜をささげる者とを惑わした偽預言者も捕らえられた。」(啓示 19:20)

それで、白い馬が表しているのは「地の野獣」でありイコール「偽預言者」です。

ところで、マタイの記録に戻りますが、最初に「惑わされないように」と警告された「私がキリストだ」「その時が近づいた」という者たちについては何故か「偽預言者」という表現は使われていません。

その後、改めて偽預言者に言及されますが、それは、艱難の最中に新たに「起こる」とされており、先の「私がキリストだ・・・」という者たちとは別物だと言うことが分かります。また、それは、「近づいた」ではなく、「ここに、あそこにいる」であり、すでに存在しているという主張がなされています。

「…そして多くの偽預言者が起こって、多くの者を惑わすでしょう。」(マタイ 24:11)

「その時、『見よ、ここにキリストがいる』とか、『あそこに!』とか言う者がいても、それを信じてはなりません。偽キリストや偽預言者が起こり、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうとして、大きなしるしや不思議を行なうからです。ご覧なさい、わたしはあなた方にあらかじめ警

告しました。それゆえ、人々が、『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行ってはなりません。『見よ、奥の間にいる』と言っても、それを信じてはなりません。』（マタイ 24:23 - 26）

24：11の偽預言者は「艱難」の最中であり、23－26の偽預言者も、キリストのしるしの直前の詳細ですから、11節の偽預言者と同じ者を指しているといつて良いでしょう。

つまり時間的な要素もタイプも異なる2種類の「偽預言者」が登場するということです。これを啓示の書と比較してみますと、海から上がった野獣を崇拝するように焚きつける、地の野獣は、後発偽預言者である事が分かります。

これは、「大きなしるしや不思議を行なう」（マタイ 24:24）。「…大いなるしるしを行なって、人類の前で火を天から地に下らせることさえする」（啓示 13:13）という共通点からも分かります。

これは、その企てや引き起こす規模の大きさから言って、政治的、国家的な偽預言者に違いありません。

一方、4等の馬の先頭に出て来た白い馬つまり「地の野獣」である偽預言者は、おそらく宗教的偽預言者であると考えられます。

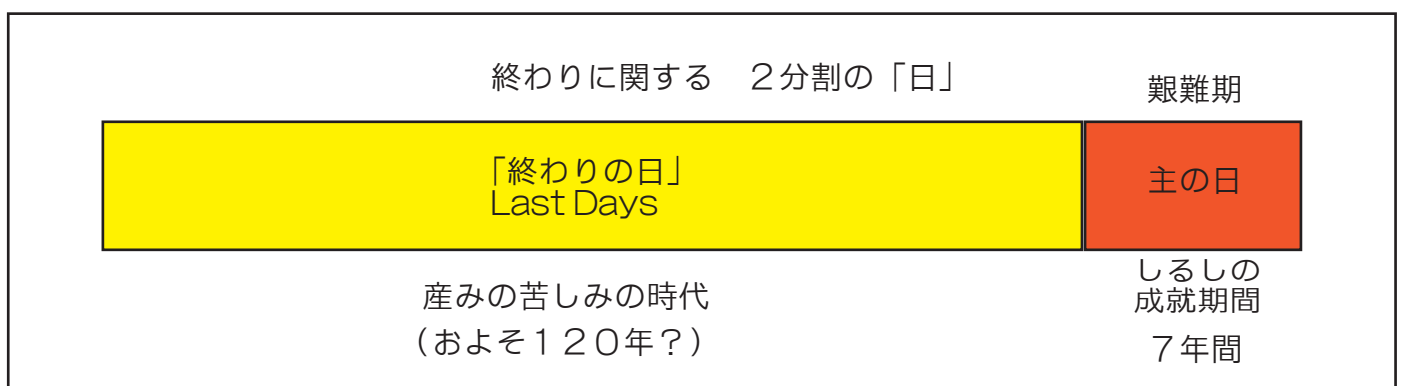
「終わりのしるし」はまだ成就していません。「荒廃をもたらす者」も未だ現れていません。

では、この「産みの苦しみ期」も、まだこれから将来の事でしょうか。或いは成就していると言えるでしょうか。

まず最初に「偽預言者」、その後「戦争」そして「食糧不足」「疫病（死）」と続く一連の災いを、近年の歴史事実をふまえて考えますと、やはり1914年の第1次世界大戦以来の災いは考慮に値するでしょう。

しかしその前の「偽預言者」の出現についてはどうでしょうか。

この偽預言者の特徴は、「わたしがキリストだ。その時が近づいた」という声なので、「末日（終末）やキリスト到来（臨在）をメインに掲げる者だ」と言うことが分かります。歴史を見ると、1900年前後の時代にそうした1大ブームがあった事が分かります。少なからぬ団体が起こり、今はすでにほとんど消滅したグループもあれば、今なお世界的にそれなりの信者数を数える団体も幾つかあります。



それで、「産みの苦しみ期」は現在すでに成就していると言って良いように思われます。

この「終わりの日」と「終わりのしるし」の違いをはっきりさせておきますと、マタイ 24 章、マルコ 13 章、ルカ 21 章で「終わりのしるし」と訳されているのは「終わり（ギリ語：シンテレイアス [the End、終わり、完了、完成]）」という語が使われ、それは最後に位置するカーソルであって、それ自体に時間的長さという概念は含まれません。

このシンテレイアスとよく混同されて扱われているのが、「ギリ語：エスカターヘメラ」（英：Last Days）です。

この語は例えば、テモテ第 2 3:1 で使われ、「終わりの時」「終わりの日」などと訳されています。こちらは、最終部分の日々（もしくは時代）という意味です。

従って、テモテ第 2 3:1-7 の記録は、先の「産みの苦しみ」の期間と合致する期間であると言えるでしょう。

この同時代の状況について福音書では、大きな出来事をグローバルな視野から語られ、一方、テモテは、人々の傾向がどうなるかを描写しています。

ところで、前ページの図表の中の「およそ 120 年？」という部分が気になった方もおられるかも知れません。

これについては、明確な根拠があるわけではありませんが、1 つの可能性として最後に加えておくことにします。

### 過ぎ去らない世代一

「あなた方に真実に言いますが、すべての事が起こるまで、この世代は決して過ぎ去りません。」  
(ルカ 21:32)

(※これに付いての詳細は、ファイル「74 「終わりの徴」の全てが起こるまで滅びない「この世代」とは何ですか」をご覧ください。)

この「すべての事」の中に何が含まれるかということですが、「しるし」となっているのは「山に逃げ始める」合図となる徴から数えて、わずか 7 年間の出来事です。

さて、これが「これらのことがみな起こるまで」という表現に含まれる「全てのこと」と言うことができるのでしょうか。

7 年間の出来事を「この時代（世代）」と表現すると考えられるのでしょうか。

無論「7 年間」を「時代」と表現してはならないと断言する根拠はないですが、通常「時代／世代」という表現は「人間の寿命」と無関係ではないという暗黙の了解があると思います。

日本語で言えば「先祖代々」の代であり、「一世一代」の代です。どんなに短くても数十年という感覚は、時代や国が変わっても共通した感覚だと思われます。

ここに何気なく「時代や国」という言葉を使ってしまったが、これが、長い分には、かなり巾があるようです。

江戸時代、戦国時代、石器時代などの表現がありますが、「この時代」（今の時代）という場合、

人の寿命とさほど変わらないはずと捉えても良いと思います。

そうであるとする、この「これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。」という表現は、「終わりはまだ」であり「産みの苦しみの始まり」と述べられた際に言及した出来事の期間を指しているにちがいません。

これらの事を考量すると、おおよそ「人の寿命」（数十年から百年前後）の間、産みの苦しみから、次第にエスカレートし、その誕生間際のピークである大患難までの間の出来事が生じる期間を「この時代／世代」と表現しているのかもしれませんが。

さて、通常、世代とは人の一生、つまり定められた寿命です。

そして、神はノアの洪水をもたらすに際して、「人の寿命」を定められたという記録があります。

「主は言われた。「わたしの霊は人の中に永久にとどまるべきではない。人は肉にすぎないのだから。」こうして、人の一生は百二十年となった。」（創世記 6:3）

神は、かつて、人の寿命を百二十才と定められました。

もちろんこれは、全ての人間が必ず百二十才まで生きる保証となったわけではなく、MAX 120ということでしょう。

めいっぱい生きて120才が限界という定めです。

これを考慮すると、全てが起こるまで決して過ぎ去る事はないということは、百二十年以内には、全てが起きるはずと考えても良いかも知れません。

従って、「この世代」は、偽預言、戦争、地震、疫病などの「産み苦しみの」時代の事であり、歴史的事実から鑑みますと、およそ西暦1900年頃からの一世代の期間内であり、つまり、西暦2020年前後にその「世代」は過ぎ去るということなのかも知れません。